

# 中国での旧軍の細菌兵器使用

# 研究部門にも証拠文書

旧日本陸軍が1940～42年、中国で細菌兵器を使用していたことを示す陸軍軍医学校防疫研究室の極秘報告書が見つかった。細菌兵器の使用は93年に見つかった陸軍参謀の業務日誌にも記述があるが、細菌戦に直接携わった研究室の公的文書でも裏付けられた。

旧日本軍の細菌戦については中国人遺族らによる損害賠償訴訟で東京地裁、高裁とも事実と認定したが、日本政府は「証拠がない」との見解を示している。

この文書は「陸軍軍医学校防疫研究報告」の第1部の「PXノ効果略算法」。市民団体「731・細菌戦部隊の実態を明らかにする

会」（事務局・東京）のメンバーが、国立国会図書館関西館（京都）で見つけた。表紙には「軍事秘密」とあり、同研究室所属の軍医少佐の名と1943年12月14日の受付期日が記されている。「PX」はこれまでの研究などからペスト菌に感染させたノミを指すことが分かっている。

報告書は、ペスト菌を実験でまいた場合の効果を試算した内容。その中で「従来ノ作戦等ニ依ルPXノ効果」として、40～42年に中国で行った六つの作戦を取り上げ、使用したノミの量と感染者数などを一覧表にまとめていた。感染者は二次感染を含めると2万594

6人の上った。また、PXを「最も優レタ弾種」と評価し、細菌戦について「精神的経済的ナ恐慌ヲ招来スルニ在ル」とする記述もあった。

同研究報告には1部と2部があり、これまで米国内で2部の800点ほどが確認され、防疫研究室が中国でのペストの「流行」を研究していたことは分かって

いた。今回、より機密性が高い1部11点を含む計12点の文書が見つかった。

旧日本軍による細菌兵器の開発は81年に作家の森村誠一氏が「悪魔の飽食」を出版したことを機に注目され、防疫研究室と関係の深い関東軍防疫給水部（731部隊）による人体実験や実戦への関与について関係者が証言をしてきた。極秘報告書の筆者は東京帝大医学部卒のエリート軍医。米軍の公文書によると、戦後の米軍の調査に「731部隊に3年半勤務した」と述べていた。（渡辺延志）